

眞言・眞事・信

——言葉の問題——

東京女子高等師範學校教授

石 井 庄 司

徒然草の終の段に、兼好法師が八歳の時に「佛様は一體ごなたがお成りになつたのでせうか」「さいふやうな問を發し、「佛様はやはり人間がなつたのだ」「さいふ父の答を得、更に次々ご先の事を問詰めて、父を困らせたごことがある。まことに八歳ぐらゐの子供は、總てのものに疑問を持ち、それを追及して行かうとするものである。そこで大人の方が全く答へられなくて困却してしまふ。

「ごごば」「さいふもの起源も同様である。一體一番はじめごごばは誰から得てきたのであるか。西洋の宗教書なきには、神ご共にありなきさいはれてゐるやうである。我が國の古典には、かういふごごばの起源に就いてははつきりした記述はないやうである。

古事記垂仁天皇の條に、本牟遲和氣命が「八拳鬚胸ヤシノムネさきに至るまで、眞事ごはずごあつて、大きくなつても、ものいふごごをなさらなかつたごある。「眞事」は「眞言」であつ

て、共に「マコト」である。ごごろが空飛ぶ鶴の聲をお聞きになつて、はじめ「アギトヒ」給ひきごある。アギトヒは鰯・鯉なきご語根を同じくする言葉で、口を開閉して、幼兒が片言を言ひ初める有様である。

この傳によるご、本牟遲和氣命は鳥の聲によつてものいふごごを學ばれたごごなるので、少くも人の言がかういふ靈鳥によつて學べられるご信ぜられたのである。

さて此の話のはじめにあつた「マコト」「さいふごごばである。マコトは眞事であり、眞言である。それは又「誠」であり「信」である。ごごばの本質は必ず「眞言」であつて、虚言はない筈である。ごごばはまた誠である「信」である。

江戸時代の國學者鈴木服の「雜屋學訓」に「言語は信ごごいふごごが記されてゐる。「信は詞のたごはざるなり道理をさくには道理のたごはぬやうに、事實をつたふるには事實のたごはぬやうに、我が心をのぶるには必ず實情より出で

て詐りなく又すべていふ程の事道理にかなひ事情にあたり世にも人にも益ありて心ある者の聞てはげに信ミ深く感ずるやうなる言を信言、又は智言と稱するこれ也。ミ述べてゐる。これこそ言語の本質といふべきである。

本居宣長は古事記傳の總論の中で「心」を「事」「言」とは相稱ふものであつて、古言・古意・古道といふものが一つであるといふことを説いてゐる。鈴木胤はいふまでもなく本居の學問を繼承する人であるが、更に儒學的考へ方も入つてゐるやうである。

こゝで私は、昭和十六年三月に發令された國民學校の國民科國語の要旨の中に「國民的思考感動なる語のあることを指摘したい。國民的思考感動とは、別の語でいへば國語であり、生きた國語といふことである。國語は日本人の精神的血液であることは上田萬年の名言である。それは飽くまでも眞言が眞事であり、信であるところにある。

こゝでは屢々輕侮され、ただこゝばの上だけのものと言はれ、輕視される。しかし言葉は決して符牒ではなく、事物そのものであり、また一種獨特の働きを持つてゐるのである。頑固な心の持主も、稚兒の一言によつて数十年の惡夢から醒めて眞人間に入つたといふ話もある。「お早うございます」「いひ、「お早うございます」返す挨拶の中、吾々は本當の仲間であるといふ結合が得られるのである。東亞

共榮圈の結合も一に言葉によつて可能であるこゝを信ずるのである。

昨秋大東亞文學者會の席上、日滿蒙華の文學者達が一同に會し、いづれも巧みな日本語によつて東亞の結合の説かれるのを聴き、自分はずく／＼さう感じたのである。東亞を一つに結ぶものは、言葉であるこゝ。

今次の議會に於て、橋田文相は南方共榮圈の言語政策に就いて重大な發言をせられた。國語の學習は困難であるかも知れない。しかしその困難を克服して、國語を習得させるこゝろにまた一つの意義があるのであつて、輕々に國語を改めて、他國人に迎合するやうなこゝがあつてはならぬといふやうな意味のこゝを言はれた。國語こそは國の姿である。國の眞の姿、それが眞事であり、眞言である。

南方共榮圈に對する國語の方策といふやうなこゝを考へるこゝき、さうしても等閑に附するこゝの出来ないのは、國內的に國語の修練を積み重ねて、立派なものにするこゝといふこゝである。言葉を磨くこゝは國を磨くこゝであり、國體の精華を發揮するこゝである。

その國體の精華を發揮するための國語の修練は、まづ母親の第一のつこめである。人の子が生まれ落ちてはじめて耳にするのは、母の言葉である。幼兒が母の乳房をふくみながら耳傾けて聴き入るのも母の聲である。眠るのも母の

歌聲であり、覺めるのもやさしい母の聲である。全く二六時中、母の言葉によつて育てられて行くのである。母の言語こそは實に國を磨く礎となるものである。その聲が澄み通り、明朗快活でなければならぬ。力強い母の言葉によつて、子供は力強く育つのである。國語を磨く教師としての母の任務の重いことは、いくら説き過きても過ぎることはないと思はれる。

次に國語を磨く教師として大切な人は、幼稚園の先生方である。生みの母を離れ、はじめて専門の教育者として接する幼稚園の先生の言葉が幼児に及ぼす感化の大きいことは今更いふまでもない。強い國民、やさしい國民、國民的思考感動の總ては、まづ幼稚園によつて育てられる。國民學校の國語の任務は勿論大きいことは大きい、しかし幼稚園に於ては殆ど總てが言葉である。やさしい言葉と共に明るい、淨い、まづ直ぐな眞言がほしい。正しいまじりけのない言葉、それはすぐ正しいまじりけのない幼児を育成することとなる。

さて、一體自分の言葉はさうして磨いて行くことが出来るようか。嘗て或方が自分の妻の言葉遣の粗雑さに氣附き、面を向かつて注意しても聞き入れられさうもなかつたので、共に謠の稽古を初められたところ、忽ちにその奥様の日常の言葉遣までもよくなつたといふことである。謠曲を

うなつたからきて、日常の話し合に、「急ぎ候程」も「うのうそれなる」も言ふ譯ではない。しかし古典に親しむといふことは言葉に對する感覺を鋭敏にし、やがて自分の言葉遣に就ても選擇が出来るやうになるものである。さういふ點で、國民がそれ／＼攝るべき古典に親しむことによつて、その國民の國語力を伸張させ、もつこ水準を高めねばならない。

次は注意して他人の話を聴くといふことである。ラヂオを通して人の話を聴くことも必要である。さかく我々日本人は聴き下手であるといふ。聴き上手の人は、自然そこへよい話をする人が集つて行く。古くは大隈伯爵、近くは近衛公爵、いづれも聴き上手のことである。したがつてそこへはいつも一流の智慧者が集るのだといふ。少くも婦人は、人の話をよく聴くと共にまた人をして耳を傾けさせるやうな楽しい明るい話手であつてほしい。話すことを楽しむところによい言葉が磨かれてゆくのである。陰氣な人の噂話などでなしに、もつこ淨く明るい話がほしい。眞言の語がほしい。